

令和 5(2023)年エイズ発生動向 - 概要 -

厚生労働省エイズ動向委員会

エイズ動向委員会は、都道府県等からの報告に基づき日本国内の患者発生動向を把握し公表している。本稿では、令和 5 年(以下、「2023 年」と西暦で表記する。)1 年間の発生動向の概要を報告する。2023 年に報告された HIV 感染者は 669 件、AIDS 患者は 291 件であり、HIV 感染者と AIDS 患者を合わせた新規報告数は 960 件であった(図 1)。累積報告数は、2023 年末の時点では HIV 感染者 24,532 件、AIDS 患者 10,849 件で計 35,381 件となった(図 2)。集計には、凝固因子製剤による感染例は含まれていない。

注)「HIV 感染者」:感染症法の規定に基づく後天性免疫不全症候群発生届により無症候性キャリアあるいはその他として報告されたもの。

「AIDS 患者」:初回報告時に AIDS と診断されたもの(既に HIV 感染者として報告されている症例が AIDS を発症する等病状に変化を生じた場合は除く)。但し、平成 11(1999)年 3 月 31 日までの AIDS 患者には病状変化による AIDS 患者報告が含まれている。

1. 結果

(1) 報告数

2023 年 HIV 感染者年間新規報告数は 669 件(2019 年 903 件、2020 年 750 件、2021 年 742 件、2022 年 632 件)であり、7 年ぶりに増加し、AIDS 患者年間新規報告数は 291 件(2019 年 333 件、2020 年 345 件、2021 年 315 件、2022 年 252 件)であり、3 年ぶりに増加した(図 1)。HIV 感染者と AIDS 患者を合わせた新規報告数に占める AIDS 患者の割合は 30.3%であった。

図 1. HIV 感染者および AIDS 患者の年間新規報告数の推移

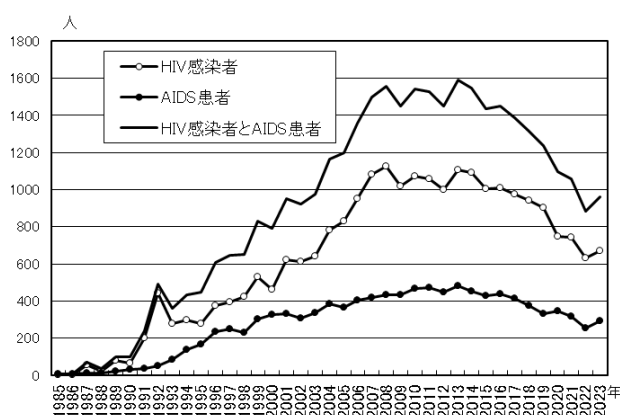
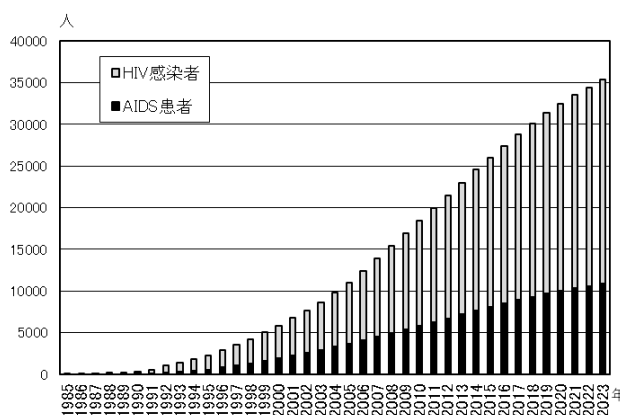


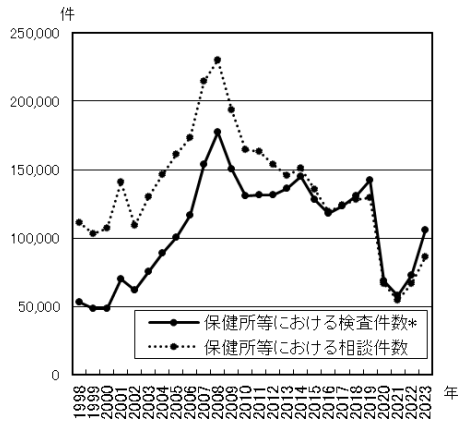
図 2. 各年末までの累積報告数



(2) 保健所等における検査・相談件数

2023 年の保健所における HIV 検査件数と自治体を実施する保健所以外の HIV 検査件数の合計は 106,137 件(2019 年 142,260 件、2020 年 68,998 件、2021 年 58,172 件、2022 年 73,104 件)であり、2019 年と比較すると少ないものの、4 年ぶりに 10 万件を超えた(図 3)。

図3. 保健所等における検査件数および相談件数の推移

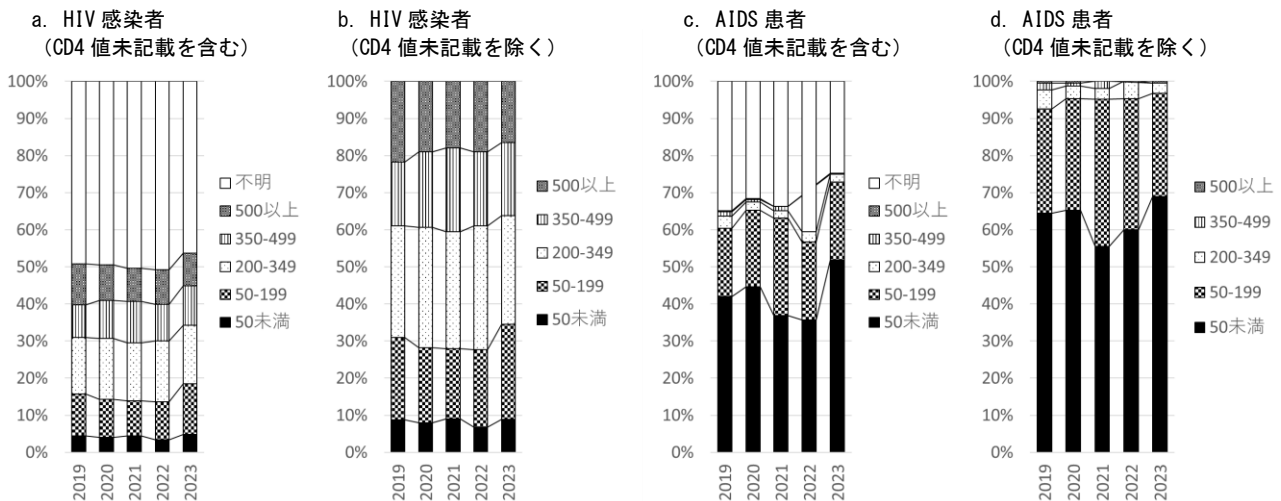


*保健所におけるHIV検査件数と自治体が実施する保健所以外の検査件数の合計

(3) CD4 値の分布

2019年1月1日から発生届に診断時のCD4値が追加された。CD4値の記載のあった2023年HIV感染者新規報告のうち、CD4値<350/ μ Lの割合は63.8%(229/359)、CD4値<200/ μ Lの割合は34.5%(124/359)であった(図4-b)。CD4値の記載のあった2023年AIDS患者新規報告のうち、CD4値<50/ μ Lの割合は68.9%(151/219)であった(図4-d)。

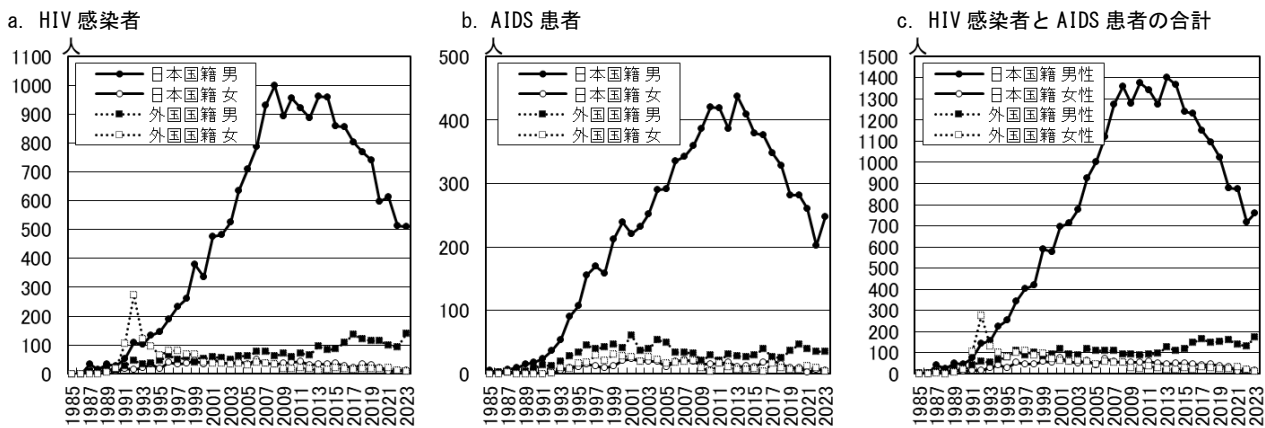
図4. 新規報告における診断時のCD4値の分布



(4) 性別、国籍別報告数

日本国籍男性について、2023年のHIV感染者年間新規報告数(511件)は前年より4件減少し(図5-a)、AIDS患者新規報告者数(247件)は前年より45件増加した(図5-b)。外国国籍男性について、2023年のHIV感染者年間新規報告数は6年ぶりに増加し、138件で過去最多となった。AIDS患者年間新規報告数は前年と同じ35件だった。日本国籍女性について、2023年のHIV感染者年間新規報告数は前年と同じ12件、AIDS患者年間新規報告数は前年より1件減の5件であった。外国国籍女性について、2023年のHIV感染者年間新規報告数(8件)、AIDS患者年間新規報告数(4件)ともに前年より減少した。

図 5. 性別、国籍別年間新規報告数の推移

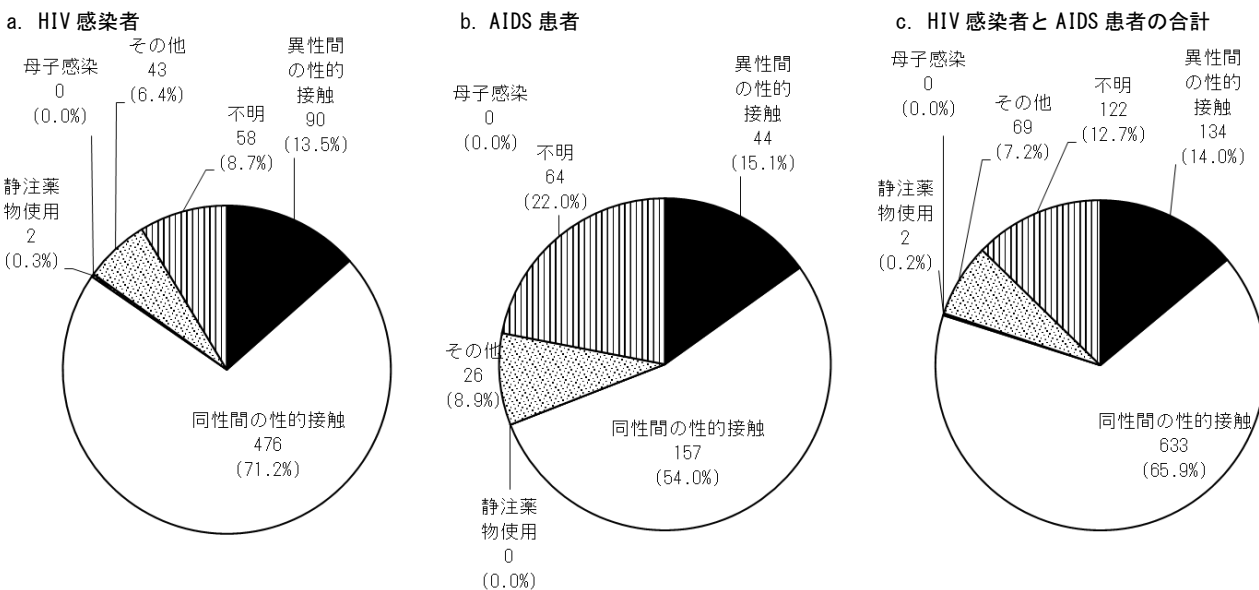


(5) 感染経路別、年齢階級別報告数

2023 年新規報告を感染経路別にみると、HIV 感染者、AIDS 患者のいずれにおいても、同性間性的接触が半数以上を占めた(図 6-a, b)。静注薬物使用が 2 件(その他に含まれる他の感染経路と静注薬物使用の両者の可能性があるものを合わせると計 6 件)報告された(図 6-c)。

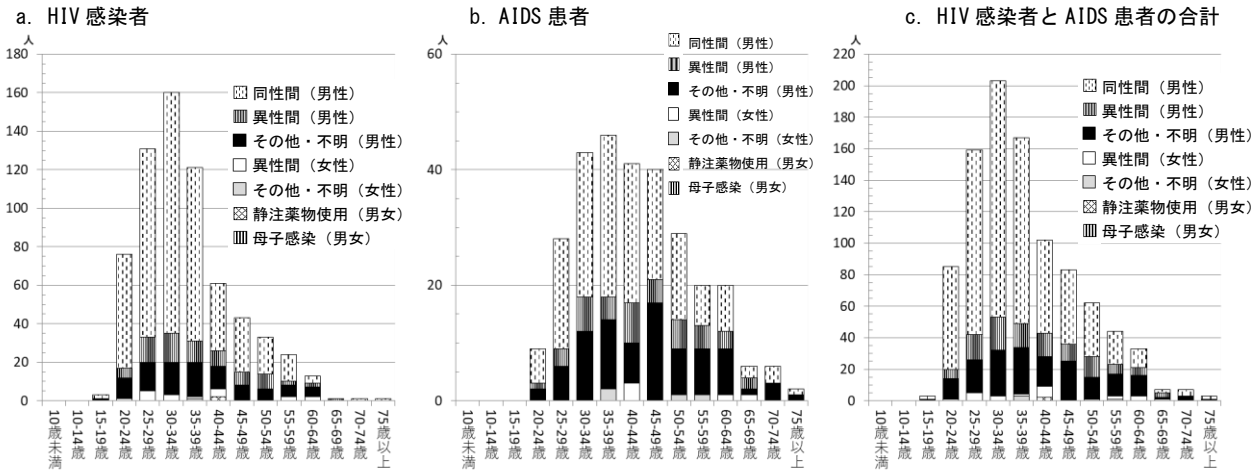
2023 年新規報告を年齢階級別にみると、HIV 感染者では 30-34 歳が最も多く、AIDS 患者では 35-39 歳が最も多かった(図 7-a,b)。年齢の高い層および AIDS 患者では、若年層および HIV 感染者と比較して同性間性的接触(男性)以外の感染経路の割合が高い傾向があった(図 7-a,b)。

図 6. 2023 年新規報告の感染経路別内訳



*同性間の性的接触には両性間の性的接触が含まれる。その他の感染経路には、発生届で「その他」にチェックされたもの(2019 年 1 月 1 日からの発生届の変更に伴う 1 性的接触のウ.不明にチェックされたものも含まれる)に加えて、輸血などに伴う感染や可能性のある感染経路が複数ある例(同性間の性的接触と静注薬物使用のいずれかなど)が含まれる。なお、2018 年までの発生届には性的接触であるが同性間か異性間か不明な場合の欄がなく、この場合、「その他」にチェックされ、その旨自由記載されることがあり、感染経路その他に分類されていた。HIV 感染者と AIDS 患者を合わせた新規報告における感染経路その他の件数の推移は 2016 年 39 件(うち性的接触の不明 11 件)、2017 年 44 件(うち性的接触の不明 19 件)、2018 年 35 件(うち性的接触の不明 16 件)、2019 年 62 件(うち性的接触の不明 44 件)、2020 年 54 件(うち性的接触の不明 44 件)、2021 年 71 件(うち性的接触の不明 60 件)、2022 年 46 件(うち性的接触の不明 43 件)、2023 年 69 件(うち性的接触の不明 62 件)であった。2019 年 1 月 1 日から適用された発生届の書式変更で 1 性的接触のウ不明の欄ができたことにより、性的接触の不明(エイズ発生動向年報では感染経路その他に分類)の報告が増加した可能性がある。

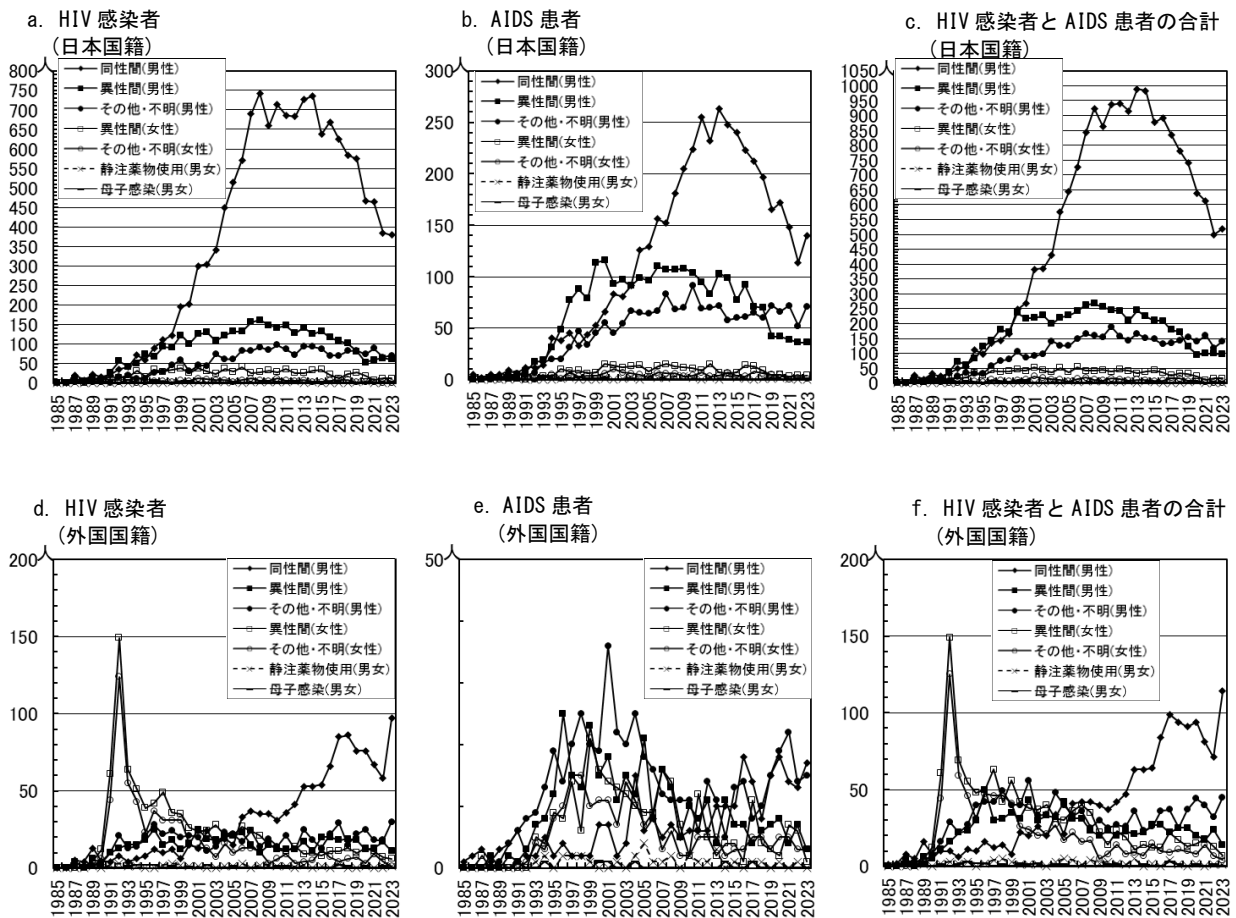
図7. 2023年新規報告における年齢階級別感染経路別内訳



(6) 感染経路別、国籍別年間新規報告数の推移

日本国籍の HIV 感染者(図 8-a)、日本国籍の AIDS 患者(図 8-b)、外国国籍の HIV 感染者(図 8-d)、外国国籍の AIDS 患者(図 8-e)のいずれにおいても、同性間(男性)が最も多かった。HIV 感染者の同性間(男性)について、日本国籍では 2023 年に前年より減少したのに対し(図 8-a)、外国国籍では増加し、過去最多となった(図 8-d)。AIDS 患者の同性間(男性)について、日本国籍(図 8-b)、外国国籍(図 8-e)ともに、2023 年は前年より増加した。

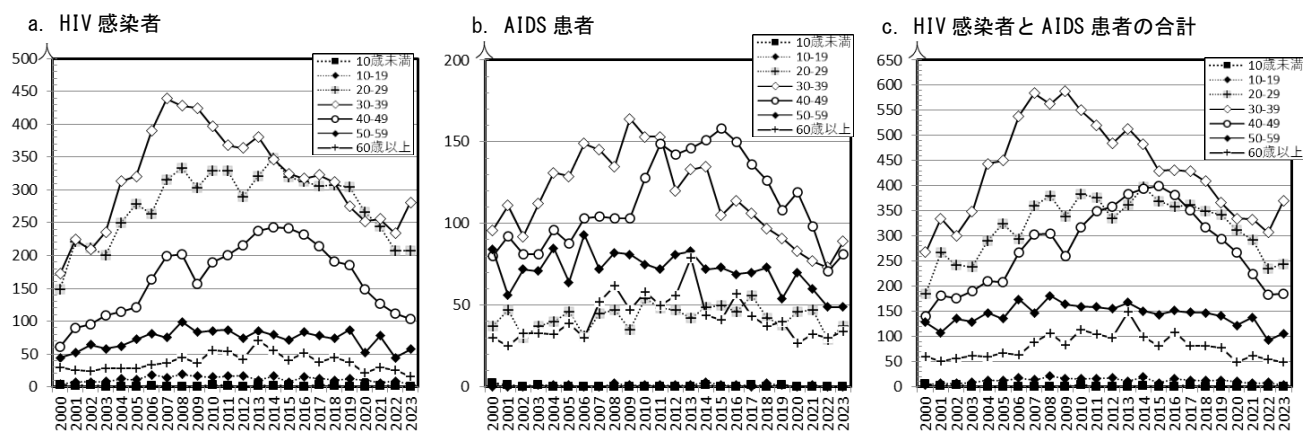
図8. 感染経路別、国籍別年間新規報告数の推移



(7) 年齢階級別の年間新規報告数の推移

年齢階級別年間新規報告数の推移(図9)を示す。2023年 HIV 感染者年間新規報告数は30-39歳と50-59歳で前年より増加した(図9-a)。2023年 AIDS 患者年間新規報告数はグラフに示す全ての年齢層で前年より増加または横ばいであった(図9-b)。

図9. 年齢階級別年間新規報告数の推移

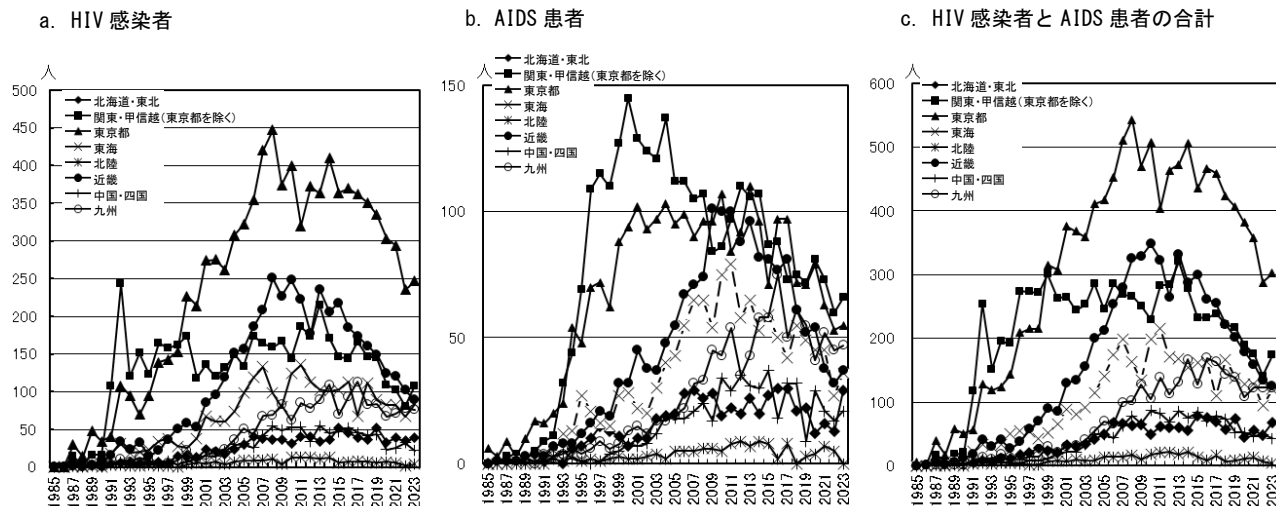


(8) 推定される感染地域および報告地

2023年新規報告の推定感染地域について、HIV 感染者の80.7%、AIDS 患者の68.7%が国内感染であった(表1)。

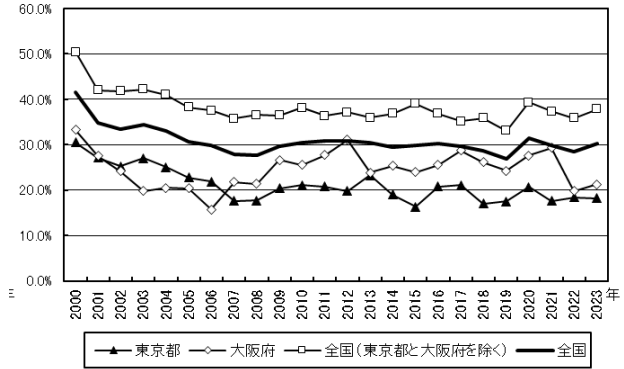
報告地(ブロック)について、2023年 HIV 感染者新規報告数は東京都、東京都を除く関東・甲信越、近畿、東海、九州、北海道・東北、中国・四国、北陸の順に多く(図10-a)、2023年 AIDS 患者新規報告数は東京都を除く関東・甲信越、東京都、九州、近畿、東海、北海道・東北、中国・四国の順に多かった(図10-b)。北陸でのAIDS 患者新規報告数は0件であった。2023年 HIV 感染者年間新規報告数は北海道・東北、関東・甲信越(東京都を除く)、東京都、東海、北陸で前年より増加した(図10-a)。2023年 AIDS 患者年間新規報告数は北陸以外のすべての地域ブロックで前年より増加した(図10-b)。

図10. 年間新規報告数の報告地(ブロック)別推移



HIV 感染者と AIDS 患者を合わせた新規報告数に占める AIDS 患者の割合の年次推移を図 11 に示す。東京都では 18.2%(前年 18.4%)、大阪府では 21.3%(前年 19.8%)、全国では 30.3%(前年 28.5%)であり、東京都、大阪府を除くと 37.9%(前年 35.8%)であった。

図 11. HIV 感染者と AIDS 患者新規報告数に占める AIDS 患者の割合の年次推移



2. まとめ

2023 年の新規報告数は、HIV 感染者 669 件、AIDS 患者 291 件、HIV 感染者と AIDS 患者の合計 960 件であり、HIV 感染者は 7 年ぶりに増加し、AIDS 患者は 3 年ぶりに増加した。2023 年の HIV 感染者と AIDS 患者を合わせた新規報告数に占める AIDS 患者の割合は 30.3%であり、前年より増加した。

2023 年の保健所等における検査件数は、2019 年と比較すると少ないものの、4 年ぶりに 10 万件を超えた。2020 年以降の動向については、国内で 2020 年 1 月に初めて報告された新型コロナウイルス感染症の流行に伴う検査機会の減少等の影響で無症状感染者が十分に診断されていなかった可能性に留意する必要がある。

性別について、HIV 感染者新規報告、AIDS 患者新規報告のいずれも男性が約 97%を占め、感染経路については、HIV 感染者の 71.2%、AIDS 患者の 54.0%が同性間性的接触と報告された。また、静注薬物使用は 2 件(その他に含まれる他の感染経路と静注薬物使用の両者の可能性があるものを合わせると計 6 件)報告された。

2023 年新規報告数を国籍別にみると、HIV 感染者の 76.4%、AIDS 患者の 84.9%が日本国籍男性、HIV 感染者の 20.6%、AIDS 患者の 12.0%が外国国籍男性であった。HIV 感染者は、日本国籍男性が前年より減少したのに対し、外国国籍男性は 6 年ぶりに増加し、過去最多となった。一方で、AIDS 患者は、日本国籍男性が前年より増加し、外国国籍男性は前年と同数であった。外国国籍男性の HIV 感染者の増加は、特に 20 歳代と 30 歳代での増加が大きく、すべての報告地(ブロック)で前年より増加した。外国国籍男性においても推定感染地は国内が大半を占めた。社会的な背景も踏まえ、外国国籍を有する者に対する検査体制や受診しやすい環境の整備が重要である。

年齢では、HIV 感染者新規報告数は 20 歳代と 30 歳代が多く、若年層の個別施策層に重点を置いた予防啓発が引き続き重要である。AIDS 患者年間新規報告数は 30 歳代と 40 歳代が多かった。高齢層では AIDS 患者として報告される件数の割合が高い傾向にあることから、高齢層においても検査の機会を十分に提供する必要がある。

報告地(ブロック)に関して、HIV 感染者年間新規報告数は北海道・東北、関東・甲信越(東京都を除く)、東京都、東海、北陸で前年より増加した。AIDS 患者年間新規報告数は北陸以外のすべての地域ブロックで前年より増加した。大都市圏以外では、HIV 感染者と AIDS 患者の新規報告数の合計に占める AIDS 患者新規報告数の占める割合が高い傾向にあった。報告数の多い大都市圏での感染拡大防止に向けた対策を引き続き行うとともに、2020 年以降、診断が遅れている可能性に留意し、新規報告数に占める AIDS 患者の割合が高い地域では早期診断に向けた更なる対策が求められる。それぞれの地域における HIV 感染者及び AIDS 患者の発生动向の特性に合った対策の展開が望まれる。

HIV 感染者、AIDS 患者の早期診断、早期治療のために検査の必要性を広報し、多様な場面での検査機会の提供、および自治体での検査体制をより充実させることが求められる。

引き続き、エイズ予防指針に基づいた予防対策、相談・検査を受けやすい体制の整備等を進める必要がある。